

山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に付させば流れ

くい。住みにくさが高じると、安らぎ越したくなる

詩が生れて、画が出来

人の世を作つたものは神でもか

の人である。ただの人

しの国へ行くばかり

越す事のならぬ

の間でも住みよくな

あらゆる芸術の士は

住みにくき世から、住みにくき頃いを引

てある。あるは音楽し彫刻である。

こまかに云ふには写さないでもよい

りに見れば、そ

に詩も生き、歌も湧く。

着想を紙に落さぬとも、

珍鏘の音は胸裏

画架に向つて、余抹せんでも五彩の絢爛は自から心眼に映る。

ただおのが住む世を

靈台方

のカメラに澆季潤潤の俗界を清くうららかに收め得れば足る。

この故に尺縫なきも、かく人世を観じ得るの点において、かく

